

この人に会いました

元気な高齢者に突撃インタビュー

若い頃瓦葺職人だった
小倉清作さん(90歳)を
訪ねて(中里在住)



職人になるまでの道のりは五日町大杉で生まれ14才(昭和4年)で東京に働き出て一生懸命働いてそれなりの結果も出したが経営者への不信心から、夜逃げ同然で辞めてしまった。職探しに奔走したが昭和の大不景気の頃、思うように職に就けずいた時、声を掛けてくれたのが瓦葺職人の親父だった。そこでまた一生懸命働いて職人として腕を磨いた。しかし昭和12年(21歳)の時赤紙で戦地に向き、終戦後1年間の捕虜生活後、昭和21年(30歳)に帰国。

(10年近くの戦時体験話
はまるで映画を見ている
ような錯覚になるほどい
ろいろな開戦の名前が出

てリアルで具体的な内容であった。なかでも120名の部下の戦死を今でも忘れることなく供養されている事に感銘を受けた。)

ここからが職人人生ですね

五日町で職人として働いている中で、高半ホテルの屋根の修理がきたのが事の始まり、瓦屋根が普及されていない湯沢ならと、親方の反対を押し切って、結婚したばかりの妻と二人で湯沢に仕事場を構えたのが昭和26年(35歳)の時、時代の流れとはいえ、瓦葺職人として腕を発揮した時期があったことはいい人生であったと実感している。

特に苦勞は無かったですか
事務的には無かったが、よそ者感情が強く、閉鎖的でいつまでも住民として受け入れてもらえなかったこと。

いまの生きがいは
プールに行ったり、野菜づくりをしたりしながら元気で過ごす事。

若い頃編物で身を立えた
高橋トシさん(89歳)を
訪ねて(桑町在住)



生まれ在所はどちらですか

6人兄弟の末っ子として湯沢で生まれ育った。でも幼い頃耳を患ってから一人で身を立てなければと、高等科を卒業後和裁の技術を取得、その後編物の技術を取得するため東京に行き講師の免状をもらって身を立てる事が出来た。

結婚生活についてはどうですか

26歳の時人の勧めで結婚、6人の子供を授かったが2人を病で亡くしてしまつた。結婚生活は苦勞の連続、人様に話せる状況ではないが、子供が生きて支えであった事は確か。49歳で死別後は編

物一筋で頑張り60歳まで教室を続ける事が出来た。教室を閉じてからの楽しみは

茶屋でうどんづくりをさせてもらったが、働ける生きがいもあって、85歳になるまで20年以上も続けられたことは嬉しかったです。

今はどう過ごしているんですか

誘ってもらつたプールが楽しみで、続けて行きたいと思つている。毛糸の人形作りも保育園の子供たちが喜んでくれるので作つていきたい、本も読みたい、野菜作りもしたい、孫やひ孫と遊びたい、まだまだやりたいことがあつて困つてしまつた。「びんびんころり」を目標に元気で過ごしている。今はいい世の中で感謝しています。



福祉保健課より紹介していただいた、お二人とも、とにかく元気で趣味も多く、生きることの意義を教えられた気がしました。たくさんお話していただきましたが紙面の都合上簡単になってしまったことをお詫びいたします。

広報委員 今村・南雲(正)

編集後記

「絆(きずな)」

■上村新町長の初議会でした。就任してまだ十日程しか経っていない時の議会だけに、さすがに緊張しておられたようでした。しかし、議員の発言や質問は自分のノートにメモをし、丁寧に答えようと努力しておられる様子は、大方の好感を呼んだようです。

議会終了と共に始まつた豪雪の対策本部長として、さつそくのリーダーシップが求められていますが、その手腕の程が期待されます。

■「雪地獄 父祖の地なれば 住み継げり」

これは昭和十三年の元旦の夜、雪の重みで倒壊し死者六十九人を出した十日町の映画館跡に鎮魂のために建てられた観音堂に献じられた句だということです。

今まさに雪地獄。道行き交う人の会話は雪への怨嗟の声ばかりです。まだ雪の季節は始まつたばかり、今年ほど春を待たれる年はないと言えましょう。これほど苦しめられても、雪消えと共にその苦難はすっかり忘れ、湯沢ほどいい所はないと思うのですから、これは不思議と言わざるを得ません。ともあれ、これで豪雪は終わり、あとは穏やかな冬として過ぎてほしいと願うばかりです。

佐藤 守正 広報委員

編集

湯沢町議会
広報対策特別委員会